

# 新しい発見と出会いを生み出した 関西ベ平連とハンパク

— 植野芳雄氏に聞く

語り手：植野 芳雄

元関西ベ平連、元ハンパク協会メンバー

聞き手：大月 功雄

立命館大学国際平和ミュージアム学芸員

大野 光明

滋賀県立大学人間文化学部准教授

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

番匠 健一

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターリサーチャー

福井 優

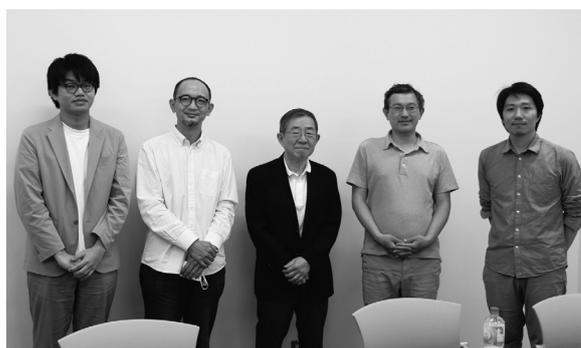
立命館大学大学院文学研究科博士後期課程

2024年3月14日、坂本洋さん（元北摂ベ平連）ご自宅にて  
2024年5月29日、立命館大学国際平和ミュージアム会議室にて

立命館大学国際平和ミュージアム・平和教育研究センターでは2018年から「反戦のための万国博」（通称「ハンパク」あるいは「反博」）に関する共同研究を続けている。ハンパクは1969年8月に大阪城公園を会場に「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）が中心となって開催された。ハンパクでは翌年に控えた大阪万博が批判されただけでなく、万博問題にとどまらない多様なテーマに取り組んできた各地の反戦・反基地運動、反開発住民運動、アートやフォークなどの運動を集めた「解放区」がつけられた。

本稿はハンパクを主催した「ハンパク協会」の活動の中心を担った植野芳雄さんへのインタビュー記録である。聞き手は前述の共同研究のメンバーの4人である。植野さんは1948年1月、まだ戦争の傷跡の残る大阪市内に生まれ、関西学院大学在学中に学生運動とベ平連の運動に参加した。本インタビューでは植野さんの生い立ちから始まり、主には1968年2月に結成された関西ベ平連の立ち上げとその活動、そしてハンパクの企画と運営に奔走された日々についてお話を伺った。当時の大阪では反戦

デモや梅田地下街での対話集会が熱く活発に行われ、それらに集まった人びとの渦がハンパクへと合流していくようすが語られている。関西ベ平連とハンパクの運動は、単に反戦を求めた政治運動であっただけでなく、演劇、映画、音楽などの多種多様な表現と異議申し立てを含むものだった。



写真：左から福井、大野、植野芳雄さん、番匠、大月。  
2024年5月29日、立命館大学国際平和ミュージアム会議室にて。

## 生い立ち——戦後の大阪での生活

番匠：今日はハンパクやベ平連のことだけでなく、生い立ちから大学時代のお話など、植野さんのライフストーリーについても伺えればと思います。よろ

しく願います。

植野：こちらこそよろしく願います。

番匠：お生まれはどちらになりますか。

植野：大阪の阿倍野のほうです。最寄りの駅は今でいうと「昭和町」、地下鉄でいうと「西田辺」の辺りですね。大きく言えば天王寺に近い。父親は高知から出てきて大阪の学校に行った後、会社勤めをしていて、ずっと大阪ですね。母親は大阪から出たことないぐらいの大阪の人ですね。母は高校が夕陽丘、小田実さんの先輩になるんでしょうね。その頃は女学校でしたが。

大野：植野さんのお生まれは1948年ですか。

植野：48年です。1月の早生まれなので、47年生まれの人たちと同学年。一番人口の多かった世代ですね。

大野：47年、8年というときまだ戦争の爪跡はあったと思います。

植野：ありましたね。父親、母親あるいはおじいさん、おばあさんといった人たちから戦争の話、特に空襲について聞いていました。おじいさんや父親は出征し、軍隊経験もありました。身近な家族で戦争で亡くなった人はいないんですけど、親戚には戦争で亡くなった人もいました。天王寺あたりまで行くと、米兵、進駐軍の人たちの姿を見ることもあったし、小さい頃にはチョコレートやキャンディーを配られ、もらったこともあるような気がします。まだ焼け跡もありました。

大野：お父さまとおじいさまは出征されていたんですか。

植野：はい。母方のおじいさんはシンガポールのあたりに行っていたのですが、ほとんど戦場には出てないみたいで。よく笑い話で聞かされましたけど、船で行く途中で急に病気になったらしい。それで戻らされたので、鉄砲を持っていたけど、撃ったことがないと。いわゆる軍刀というか、それも抜いたことがないと、笑い話みたいに言っていましたね。父親も外地には行ってないと聞いています。熊本かどこかだったと。

父親やおじいさんの戦争体験よりも、母やおばあさんの空襲体験や戦後間もない頃の物が無い時代の

話が印象に残っていますね。空襲の際、一番悲惨だったのは、今の千日前辺りです。道頓堀川があったあたりは、みんなが逃げて、死体が浮かんでいたり。すぐ近くに焼夷弾が落ちた経験をしたと聞いたことがあります。大空襲の後、家族みんなで奈良へ疎開していたらしいです。そこは逆にのんびりとした、いいところだったとも聞かされました。

大野：お父さんはどういうお仕事をなさっていたのですか。

植野：フィリピンなどからいわゆる生ゴムを輸入して、それを合成ゴムに変え、自転車のタイヤやゴムバンドなどをつくる会社で技術者をやっていたんですね。会社は西成にありました。父は大阪工業大学で技術系の勉強をしていたようです。

番匠：幼少期の暮らしで何か覚えていることはありますか。

植野：ちょうど家の前に原っぱがあって遊んでいました。当時はまだテレビもなかったと思うんです。だから映画が娯楽で、家の近くには阪南東映という映画館がありましてね。週替わりで作品が変わっていて、時代劇ばかりでしたけど、よく見に連れていってもらいました。あとはラジオですよ。家族で布団に横になってラジオを聞いていたのも覚えています。

番匠：小学校もその辺りですか。

植野：常盤小学校といって阿倍野や天王寺の近くなんです。私のときには1学年11クラス。1クラスに72人もいたんです。5年生、6年生のときにはとうとう教室が足りなくなりました。3階建ての上に4階を積み増したりしてましたね。今考えたら大丈夫なんかなと思うんですけど。おそらく当時、日本で一番人数の多い小学校でした。中学は文の里中学校で、1学年26クラスでした。1クラスが五十数名で、1学年が約1,400人弱。日本で一番人数の多い小学校、中学校だったのかなと思います。

1955年、1年生か2年生のとき、担任の若い女の先生がいきなり黒板に「一九五五」と書いた。「皆さんこの数字を覚えておいてね。ものすごく力強い数字に見えませんか」って言うんですよ。「日本がよいよこれから復興していくんだ。今まで皆

さん方も非常に苦しい思いをしたかも分からないけれど、これから日本は元気になるのよ」と。それが非常に印象に残っている。まさに55年体制の頃で、子供たちもともかく元気でした。

小学校の頃からクラスに在日朝鮮人の方が2、3人いましたね。その子らがいじめられたり、逆に学校の先生方が守るといようなことがあった。小学5年か6年になってからかな、近くに宇部興産<sup>1)</sup>の社宅があったんですよ。そこから通っている韓国人の子弟もいました。ひょっとしたら炭鉱へ強制連行された生き残りのご家族だったのかもしれない。石炭会社というのは当時の日本でいうと大企業だったんでしょう。宇部興産は「お金持ちの子」の代名詞みたいな感じもありました。

番匠：在日の子であってもですか。

植野：在日の子はそういう見方はされなかったと思います。日本人の男の子はたしかに身なりがよかったです。

大野：戦後民主主義や戦後教育についての記憶はありますか。

植野：さきほどの女性の先生のように、明確に反戦平和や民主主義を声高に言うわけではないけれど、憲法の話などは真面目にされていたと思います。ただ、中学校の日本史の先生で、太平洋戦争の直前まで授業で話した後、「これでやめる」と言いましたね。「けったくそ悪いから日本が負けた話はせえへん」とか言うてね。先生がそこから先の授業を放棄してました。顔つきもいかにも東條英機みたいな先生でした。

先生方は2つに分かれていたと思うんですよ。1つは学徒動員含めて子供たちに対する罪の意識をもつ人たち。一方は軍国主義がまだ残っている人たち。高校の体育の先生にも、見るからに昔の教育をそのままやりたいという感じの人がいました。高橋和巳<sup>2)</sup>さんが高校の先輩なんですけれど、随筆か何かでその先生のことを書いていましたね。

大野：60年安保がちょうど12歳のとき。中学に入るぐらいでしょうか。

植野：はい。政治や社会問題にそんなに関心はなかったけれども、みんなで「安保反対！」とデモ

ごっこをよくやっていましたね。安保が何たるかまったく知らないけれど、ただ何となく「安保反対！ 安保反対！」と言って。それこそ流行語ぐらいの感覚で。教室の中でデモのまねごとをして、先生に怒られたりしていましたね。それもラジオや新聞で聞いたり、読んだりというレベルで、実際のデモを見たことはなかったです。

大野：ご両親は社会運動に参加されていたわけでは・・・。

植野：まったくないですね。

### 高校時代——映画への関心と新聞部での活動

大野：植野さんはどのように社会問題や戦争に関心を持ち始めたのでしょうか。

植野：今宮高校の1年、2年あたりからいろんな本を読んだりして。特に戦後間もない時期の松川事件などについて知ようになった。『中央公論』なども読んだりして、何となく社会的なことに目がいった。あと、高校では新聞部に入っていたんです。ほぼ1人でやっていたと思います。大学受験の前日まで印刷屋で校正をやっていた記憶があります。別にそこで社会問題を取り上げることはなかったんですけれど。ただ新聞部だからかな、新聞を読むようになって、ちょっとずつそういうことに関心を持ち始めた。うちの家は朝日と産経を取っていました。

大野：大学に入学されるのは66年ですね。

植野：はい、66年です。

大野：そうすると65年のベトナムでの米軍による北爆開始は高校時代になりますね。

植野：そうですね。そのちょっと後になるのかも分かりませんが、本多勝一さんのルポや写真が非常にショッキングだったことは覚えています。高校の終わりか大学に入ってからでしょうかね。あとは、映画を好きでよく見ていて。大島渚の『日本の夜と霧』やできたばかりの日本アート・シアター・ギルド(ATG)<sup>3)</sup>の映画を見に行ったり。田原総一郎のドキュメンタリー作品も。

高校の裏が釜ヶ崎なんですね。親は「間違ってもあの辺は近づくな」と言ってましたけど、天王寺まで歩いていこうと思ったらそこを通るし、別に怖い

ことはないし。高校から釜ヶ崎を歩いて抜けて、天王寺公園から阿倍野へ、そして自宅まで歩いて帰ったこともありました。そこらじゅうにたくさんの野宿している人がいたし、公園にはテントを張ってる人もいた。朝早いとみんながバスへ詰め込まれていくような光景も見ました。高校で文化祭なんかがあると、いろんなものをつくる廃材を釜ヶ崎へもらいに行くこともありました。「今高 [今宮高校] の学生さんやな」と手伝ってくれたり、挙げ句の果てには酒を飲まされたこともあります。そんなんでけっこう楽しんでたんですけどね。新聞部だったので正月風景の写真でも撮ろうかと思って正月に学校に行ったのですが、高校に警察がおって、労務者の方が校内で凍死していた。年末年始に野宿していたんでしょうね。釜ヶ崎暴動<sup>4)</sup>があったのは中学校の頃かな。事件としては覚えてますけど、間近に見たわけではなかった。

大野：新聞部ではどういう記事を書かれていたんですか。

植野：よく覚えているのは、吉永小百合さんが映画のロケで奈良の法隆寺に来たんですよ。それで学校をさぼって見に行行って、吉永小百合突撃インタビューみたいなことをしました。当時の吉永さんは人気ナンバーワンですから。高校の新聞の編集長の権限で紙面トップに吉永さんの記事を載せました。

大野：新聞部に入ったきっかけはあったんですか。

植野：中学生の頃から新聞を読んで面白いなと思っていたり、おぼろげながら将来は何かそういうドキュメンタリーみたいなものを書ければという気持ちがありました。

大野：例えば、高校の校則問題とか、学生生活の中での社会的な問題に関心を持つというのは？

植野：ほとんどなかったですね。

大野：高校の中で学生運動も・・・。

植野：まったくなかったですね。クラスにそういうことに関心をもつ人もいて、意見を交わしたことはありましたけど。それが何かの運動にはならなかった。新聞部のつくる新聞の内容も学校の通達事項をお知らせするものも多かった。でも、顧問の先生による検閲はなく、好きなことを書いていました。例

えば、大学受験が一番の関心ごとですから、大学や学部の選び方について調べて記事にしたり。学校の行く進路相談というのは、成績と見合う大学をどう選ぶかというだけであって、例えば法学部と経済学部がどう違うかというような、学部の選び方についての情報は誰も教えてくれない。新聞でそういう学校の対応について批判をしていないけれど、それだったら自分たちで考え、調べて、情報を提供するというのをやりましたね。

### 関西学院大学への入学と68年1月15日のベトナム反戦デモ

番匠：演劇への関心もお持ちだったようですが。

植野：はい、惹かれたのは自由劇場ですね。もともと、高校の頃、私は古典芸能も含めて演劇にも興味を持ちまして。林屋辰三郎<sup>5)</sup>さんの『中世芸能史の研究』を、高校の時にかじった程度ですが読みました。それで立命館の日本史を受けて一応合格はしたんです。行くつもりでいたら、高校の先生が飛んできて「行くな。このまま立命に行ったら絶対大変なことになるぞ。“左”に行ってしまう」と。それで反発はしたんですけども、関学の美学科も受け、合格したんですね。美術史学や演劇学への興味も強かったので、結局関学へ行きました。でも、立命に行かなくても結局は同じようなものになった(笑)。

大野：演劇は見るほうがお好きだったんですか。舞台上に立ちたいとかは？

植野：そういう気持ちもありました。大学ではまず演劇クラブに入りました。あまり肌が合わなくて、すぐやめてしまいましたけどね。その後、関西ベ平連で青空情況劇団「目玉座」というのをつくりました。最初の公演は今の梅田駅前の陸橋でやったんです。もちろん無届けですよ。ベ平連の活動の一環みたいなもので。「目玉」というのは佐藤栄作の1つのシンボルで、劇では佐藤栄作がアメリカに取り込まれていく様子をやってみよう。公演会場は曾根崎警察に近いので、もしも警察がやったら「上手より曾根崎警察登場」みたいなことにしようとも話していました。

大野：面白い(笑)。警察も役者になってしまうわけ

ですね。

番匠：西宮の関学へはご自宅から通われたんですか。

植野：家に無理を言って数か月でしたが、宝塚に下宿させてもらったことはありました。独り暮らしの体験だけさせてほしいと。ちょっとぜいたくを言いました。

大野：大学に入るといろんな過ごし方ができると言うんです。植野さんは勉強に取り組みたかったのか、それとも映画や演劇に向かっていたのでしょうか。

植野：半々ぐらいかな。学者志向もあったので。あとはドキュメンタリーや演劇をやるといった実践へも気持ちが向かっていました。

大野：では、どのようにベ平連や社会運動、政治運動へ移っていったのでしょうか。

植野：1つはベトナム戦争の進展と反戦運動の高まりが大きかったと思います。大学に入ってから、デモに参加はしていないけれど、当然関心はあったわけですね。街でいろんな平和運動とか署名集めや募金活動をやっている方を見ていたんです。やっぱり自分なりに何か一歩踏み出さなければいけないという気持ちもすごく強かった。

大学では美学科学生研究会という研究会にかなり積極的に参加して、私は1年生のときに副会長をやっていました。でも、2年か3年上の会長ともうまったく合わなくて。その人は学究肌で社会的なことに一切関心を持たない。それにけっこう反発する気持ちがありました。研究会には同じ学科から私を含めて3人参加していたのですが、3人そろってやめようとなって、退会届をたたきつけるようにしてやめたんです。

ちょうど反戦運動が高まる中でしたが、68年の1月15日、つまり20歳になった成人式の日、いっしょに研究会を辞めた3人でともかく1回デモをやろうと決めたんです。同じ学科の女性2人もやるよと言うので、5人でやろうと。デモって警察に届けんとあかんのやということで、私一人で大阪府警に行きまして申請を書いたんです。向こうも親切なもので、こう書くんだと書き方を教えてくれて。「何人や？」と言うから、20人と書いたんです。ちょっとはったりを。扇町公園を出発して、

今はもうなくなりましたが中央郵便局（中郵）解散という、大阪では定番コースです。

みんなでプラカードをつくったりいろいろして、当日、扇町公園に集まったんですけど、当然のことながら5人しかいないんですよ。それで警官が来て、「うそつきか。20人おらへんやないか」と言うんです。えらい怒られて。「いや、その予定やってんけどな」みたいなことを言いながら、「5人やったら車道歩かされへんねん。歩道を歩け」と言うんです。そう言われてもめてるときに、颯爽とトレンチコートを着て走ってくる男の人がおったんです。これが木村満彦さん<sup>6)</sup>なんですよ。何であの人に伝わったかはわからないんですが、たぶんその頃、木村さんたちは「ベトナム反戦大阪行動委員会」、通称「大行動」<sup>7)</sup>という運動をやっていて、木村さんはその中心でした。ひょっとしたらそこへデモについてはがきか何かを出したかもわからない。

とにかく木村さんがやってきて、「君ら、今日デモをするんやろう。一緒に入るからな」と言ってもらって、むちゃくちゃ心強かったんですね。聞いたら関学の先輩で。その頃はもう卒業しておられたから、ちょうど4年上なんかな。一緒にデモを歩いってもらったんですね。木村さんは警官にいろいろ文句言うわけですよ。歯をむき出してね、「許可は道路になっているやないか」というようなことを。ああ、なるほど、こんなふうになんか言わんと、木村さんから学ぶわけですよ。でも、結局、扇町公園から中郵まで歩道を、屈辱的にも警官に「保護」されながら、プラカードを持って歩いた。これが初めてのデモやったんですね。

大野：そのデモは何のためのものだったのでしょうか。

植野：ベトナム反戦です。「殺すな」というバッジやステッカー<sup>8)</sup>がありましたので、それを1つのシンボルみたいな形にして。

大野：デモのモデルとしてベ平連があったということですか。

植野：そうですね。一応、デモ申請時の主催者団体名は「京阪神学生ベ平連」と書きました。関学の美

学科の学生しかいないのにね（笑）。そのときの公安の担当警官には、その後、私らが関西ベ平連になってからもデモ申請でよく会ったんです。向こうはちょっとびっくりしていました。最初の5人が500人の申請になって、しかも、当日は本当に500人来てるやないかと。なんかちょっと尊敬しているみたいな感じで私たちを見てくれて、いろんな話をしましたけどね。

番匠：5人のデモではゼッケンをつけてやったんですか。

植野：ゼッケンをこうしてかぶって。プラカードも持って。ステッカーは胸かどこかにつけて。「殺すな」のステッカーとバッジの両方だったかもしれません。

その前の年かな、その5人の中の男3人で東京まで歩いて行こうかという話になって、夏休みに1か月ぐらいかけて歩きました。私らは軟弱だったので、大阪から歩くと国道1号線は車で混んでいて排気ガスも多いから、まずは電車で米原まで行って。空気のきれいな米原から歩き始め、ずっといろんなところに泊めてもらいながら歩きました。最初に泊めていただいたのは米原に行く電車で知り合った方のところ。「俺もベトナム戦争反対や。今日はうちへ泊まれ」と言われて、岐阜で1泊させてもらいました。東京まですべて歩いたわけじゃないですけど、諏訪湖ぐらいままで歩きました。諏訪湖からずっと下って野辺山でしばらくアルバイトをして、信州大学の寮に泊めてもらったりしながら河口湖ぐらいままで行きました。その頃から「殺すな」バッジをずっとつけてました。

大野：バッジをつけてベトナム反戦をアピールしながら各地を歩いてみようよ。

植野：それぐらいのものです。バッジをつけているから向こうから話しかけてこられるんですね。

大野：歩いたときは、例えば信州大の学生運動であったり、各地のベ平連との交流もあったのですか。

植野：それは全然なかったです。ただ、「殺すな」バッジは東京のベ平連で作っていたと思いますね。それを買って送ってもらって。その後、ハンパクの前ぐらいから関西では「殺すな」シールをつくりま

した。たまたま豊中で北摂ベ平連をやっている坂本洋の同級生で印刷会社に勤めてた人がおったんですよ。シールなどをつくる時には、彼に頼んでほとんどただでやってもらったんです。せっかくつくるんだからということで、B4の1枚のシートに「殺すな」とか、ゲバラの顔とか10種類ぐらいろいろなシールを入れたものをつくって、梅田の地下街で売ったりもしてたと思います。例えば、滋賀県饗庭野の航空自衛隊駐屯地のことや大阪の陸上自衛隊信太山駐屯地のことなども入れて。

大野：そうすると67年の夏頃にはベ平連の存在を知っていて、連絡を取り合う関係にあったということですね。

植野：そうです。その関係があったから、おそらく1回目のデモで大行動の木村さんが来られたんだと思います。

番匠：すこし話が戻りますが、デモをやるまでの間に、関学の中ではベトナム反戦に関する活動に関わっていたんですか。

植野：映画会があったので参加したという程度ですね。

### 関西ベ平連の立ち上げ

植野：成人の日のデモのとき、木村さんが「今度、関西ベ平連<sup>9)</sup>というのをつくる予定があるんや」と言うんですね。たぶん69年の1月の何日かでしょうね、「太融寺で集まりを持つから、君らも来いよ」と言われまして。それで太融寺での第1回の関西ベ平連準備委員会のようなものに入らせてもらって。そのときに山本健治さんとか、ベ平連やハンパクに集まってくる人たちと出会うんです。

この会合では先ほど触れたベトナム反戦大阪行動委員会の人たちが中心だったんですよ。大行動はけっこう年配の人が多くて、既存の運動の活動家の方も多かったんですね。意外と考え方も硬く、ちょっと違和感を感じていました。詳しくどんな話をしたかは覚えてませんが、「じゃ、ベ平連をつくったらええやないか」で済むところが、手続がどうこう言う人が2、3人おったんです。私はその会合では一番若手であったのですが、「何かこれ、ベ

平連と違うんじゃないですか？ やるんやったらやりましようよ！」みたいな、偉そうなことを言った記憶があります。この会合から帰るとき、エレベーターで乗り合わせたのが山本健治さんでした。山本さんは「木村から聞いたで。君らこの前、5人でデモやったって。そんな感じでやったらええやないか」って言うんですよ。「うるさいおっちゃん何人かおるけど、無視してやろうやないか。あそこまで言うんやったら、お前らがやれ」って。何をやるのかよう分からんまま、関西ベ平連をつくるから、君らが中心になってやったらええねんみたいなことで。それで私は「もちろんです」と。それが山本さんとの出会いでした。1968年の1月か2月のことです。

その頃は学内では関学闘争の時期です。そちらに力点を置かざるを得ない状況もありました。いっしょにデモをやった友人たちとじゃんけんしたんですよ。Iという友人がじゃんけんに勝ったので、彼が文学部の委員長をすることにしました。私はそれに負けたので、良かったか悪かったか分かりませんが、ベ平連をやるとなった。自分の性格にはベ平連が合っていたと思うんです。それから関西ベ平連というものができあがっていきました。

番匠：学内の運動、関学闘争とはどういうものだったのでしょうか。

植野：68年の2月かな、卒業式のときに、関学で初めて警官、機動隊が入ったんです。その前ぐらいから学費問題とか、文学部では裏口入学問題みたいなことがあって、学生運動が始まっていました。我々もそういった運動にも参加して、本館封鎖のときは私もバリケードの中に入ってたんです。機動隊が来る前に外へ出ようということになったので、機動隊との衝突はなかったのですが。当時、ヘルメットはかぶってなかったと思うし、覆面もしていない。ゲバ棒も持たず、手ぶらですわ。文学部の当時の委員長が「これで解散するが、運動は続ける」みたいな話をした。バリケードの外へ出ると体育会系の学生が待っていて、私は2、3発殴られて、眼鏡を割られて、ともかく家へ帰ったということがありました。その後、関学は体育会系に牛耳られてた感じが

あって、大学になかなか入れない時期がしばらくありました。文学部では自治会ではなく委員会みたいなものができたんです。全共闘とは言ってなかったと思います。文学部では、さきほど話した成人の日にデモをやった人の誰かが委員長に立候補しないとイケないという感じになって、Iが立候補して委員長をやった。その後、本館ではなく社会学部の一番立派な建物で学生によるバリケード封鎖があって、それも機動隊が入り、東大の安田講堂と同じような形になってしまった。それでIは逮捕されました。だから、68年の2月か3月に学部本館の封鎖があって、その約1年後に社会学部の封鎖があったという流れです。

大野：68年の1月にデモをされて2月に本館封鎖に関わり、その1年後に社会学部の封鎖がある。本館封鎖と社会学部封鎖との1年ぐらいの間に関西ベ平連に関わり始めるということでしょうか。

植野：そうですね。本館封鎖があった後、大学へなかなか行けない時期があって、私は関西ベ平連の事務所につめるようになって。最初の事務所は心齋橋の近くでした<sup>10)</sup>。それが本館封鎖のちょっと後ぐらいです。

大野：学生運動にはいろんな党派だけでなくノンセクトの運動もあったと思うのですが、ベ平連に参加しようと思ったのは何か理由があったのでしょうか。

植野：私は党派のことをそんな知らなかったですね。もちろん民青は知ってました。身近にもいて、いろんな勧誘もありましたが、ただどうもやっぱり肌が合わない。党派については関学ではフロントがけっこう強かった。文学部はそうだし、社会学部もそうかな。あとは革マル、ブントなど主なセクトはそろっていましたね。第四インターもけっこう多かった。そういう人たちとの交流はあったけれど、なんとなく肌合いが違った。同じ学科の女性に民青の人がいたんです。その人の話を聞いてたら、それだけで頭が痛くなるような感じでした。最終的にその人も民青を辞めて、一時、ベ平連に来てたんですけどね。第四インターの女性もいましたけど、この人ともうまく付き合えないという感じがあった。

それと、高校か中学のとき、小田実さんの『何で

も見てやろう』<sup>11)</sup>を読んだのは大きいですね。小田実という存在、彼が言っている運動論、例えば言い出しっぺがやったらいいとか、そういう自由な動きが自分にとっては当たり前という感じがあって。

大野：民青やセクトでは上が決めたとおりに動かないといけない、自分たちから提案して何かできるというわけではない、そういう息苦しさを感じたということですか。

植野：そういうこともあったし、あとは、「ちゃんとマルクス読んだの？」みたいな上から目線が嫌でした。その頃、関西ベ平連の山本さんから言われた言葉でいまだに覚えているのが、「俺もな、マルクスのイロハなんか知らんで。その代わりホヘトは知ってんねん」って。なるほど、そう言うたらええんやと思って。つまり、理屈だけを知っててもしゃあない、まず行動することが大切やということですよ。これは名言でした。ものすごい自信になりました。

福井：学生時代に小田実からすごく影響を受けたということですが、当時、他の文化人の中で影響を受けた人はいますか。

植野：そうですね、やっぱり小田さんと大江健三郎さんが大きかったですね。もちろん開高健さん、鶴見俊輔さんもリーダー的な役割を持っておられたと思います。東京の鶴見良行さんも非常にユニークな人だったなとも感じます。

小田さんについては、私は小説をあまり読んでないんですよ。ご自身もおっしゃってましたけど、「小説」じゃなくて「大説」で、読み始めると大変なのでとっかかりがつかなくて。だから、彼の小説はちょっとしんどい。だけど、彼の1つ1つの言葉にはやっぱり影響を受け、考えさせられる点が多かったです。マルクスやレーニンとは違う言葉で、身の丈のところいろいろな話をしてもらえるというのは非常にありがたかったし、分かりやすかった、そして共感を持てた。

番匠：大学はその後、やめられたんですか。

植野：成人の日にいっしょにデモをした仲間3人ともにやめました。ほぼ同じタイミングに。正確に言うと授業料未納による除籍でした。

## 梅田地下街での対話集会と脱走兵援助の活動

植野：関西ベ平連の最初の事務所は心齋橋の安堂寺橋通というところ。長堀橋と御堂筋の交差点からちょっと北へ行ったあたりの、雑居ビルの2階を借りてたんです。

事務所には、いろんな人が集まってくるんですよ。いまだにいろいろな記憶がありますけれども、例えば、いきなり訳の分からん言葉で入ってくる人がおってね。鳥取弁で、下駄を履いた人で、「ここベ平連か？俺もベ平連をやりたい」みたいなことを言うわけなんです。「何やったらええ？」って言われれば、「今、ピラ刷ってるからちょっと手伝えよ」、そんな感じでどンドン人が増えていったんですよ。初対面同士が集まっていく。そうなってくると、先ほど話した大行動の年配の人たちは来にくくなってしまった。逆に言えば、本当に何も分からない若い連中が集まっている。そこに山本さんや木村さんなどのある意味では指導的な人がいた。立川さんという人もいたんですが、よくホー・チ・ミンの話聞かされてね。ホー・チ・ミンは解放した地域で、いくらその地域の習慣が古臭かったとしても、まずはその習慣に合わせるんだと書いていると。マルクスがどうのこうのという理論よりも、むしろ、そういう何か運動のありかた、オーバーに言えば、人としてどうするかみたいなことをベ平連の運動を通して教えてもらった。良い先生方がいたなと今でも思います。

関西ベ平連では、梅田の地下街を人が多くアピールしやすい場所だということで、街頭宣伝やフォーク集会などの活動拠点にしていきました。我々はゼッケンをつけてピラを配るわけですね。そうすると必ず、酔っ払いも含めて絡んでこられたり、真面目に議論するようになる。自然と対話集会みたいなものが生まれていきました。今思えば、あの夏休みはそれと同じようなことを歩きながらやってたんだ。だけど、答えられないこと、向こうに言い負かされることもいっぱいある。いつもこちら側の正義を押しつけられるわけじゃない。今日は言い負かされてしまったということがある。すると事務所に帰ってからみんなで反省会をして。それはよかったこと

だなと思いますね。

私たちは梅田地下街で毎日『関ベタ刊』というビラを出して配っていました。誰か一人がその日の担当になり、責任を持ってB4裏表の夕刊をつくる。毎日、担当を交代して回していく。大体2週間に1回ぐらいで回ってくるんですね。みんなそれぞれけっこう必死にやっていました。それが1年以上続いたと思いますね。毎日書く人が変わるので、紙面の主張の統一性はない。毎日、200枚とか300枚ですけれども、刷って、それを持って梅田の地下街に行って配りました。ゼッケンにもいろんな主張を書いて、アピールする。すると、地下街で小さな対話集会がそこらじゅうで始まるんです。場合によってはそのまま喫茶店で延長して話し続ける。話しかけられた人たちと一緒に飲みに行ったこともあります。

大野：梅田の地下街での活動の始まりはだいたいいつぐらいなんですか。

植野：関西ベ平連ができたのが68年の2月、3月ぐらいからでしょう。その頃は心斎橋に事務所があったのですが、68年末頃に梅田の万歳町に事務所が移り、地下街での活動が本格化します。

大野：梅田の事務所はハンパク事務局とは別なのですか。

植野：いや、同じです。関西ベ平連の事務所であり、ハンパクの事務所でもある。梅田駅近くの万歳町にありました。

大野：68年10月に南大阪ベ平連は反戦文化フェスティバル<sup>12)</sup>というイベントを開催し、そこからハンパクの構想がふくらんでいきます。植野さんがハンパクに関わり始めたのはいつ頃でしょうか。

植野：私にとって、68年は脱走米兵支援の活動<sup>13)</sup>が主でした。68年12月17日には匿っていた脱走兵が大阪で逮捕されるんですね。それまでの数か月間、私は脱走兵を匿う活動をしていたので、デモなどベ平連の公然の活動やイベントにはなるべく来るなと言われていました。だから、逮捕によって脱走兵支援の活動が終わった後、69年の初めになってからハンパクに熱心に取り組んだと思います。

大野：関西ベ平連での脱走兵を匿う活動は、東京の

ジャテックからは独立した動きだったと理解してよいのでしょうか。

植野：東京のジャテックのメンバーとの直接の交流はまったくないです。東京の方々がまとめた『となりに脱走兵がいた時代』（関谷滋・坂元良江編、思想の科学社、1998年）という本がありますが、私には知らないことが多かったんです。例えば、互いに本名を言わないというような徹底したかたちの活動ではありませんでした。緊張感なくやっていたわけではないけれど、もうすこし普通のメンバーがやっていたような感じなんです。だから、公然の場には絶対来るなというほどではなかったです。その間、運動から身を隠したというような記憶もないんです。

大野：脱走米兵の名前は？

植野：私が担当したのはクラレンス・アームステッド。当時、私たちは脱走兵だと思っていたのですが、その後に実は米軍のスパイだったということが明らかになっています。あともう一人、名前が出てこないのですが、途中で基地へ帰らせた人がいます。彼はベトナムでかなり悪性の梅毒にかかっていることが分かり、匿う先に迷惑をかけてはいけないということで、本人や東京のおそらく吉川勇一さんと話し合った結果、基地へ戻ることになった。一緒に動いていた女性は十三の淀川キリスト教病院に行って梅毒の検査をして、幸いにも陰性でした。

アームステッドの逮捕された1968年12月17日はものすごく屈辱的な、私の人生の中で最悪の日になりました。この日は彼の誕生日でした。スパイだったので、本当に彼の誕生日だったかどうかは分からないんですけれど、彼はどうしても映画を見に行きたいと言うので、今はちょうど大阪府警の近所なんですけれど、教会に匿っていたので、私がそこに迎えに行ったんです。外に電柱がいくつかあって、そこに明らかに公安みたいなのが隠れていた。今でもその様子が思い浮かぶのですが、こちらは素人であるし、注意力は散漫で、彼を外へ連れ出した途端、映画のように四方八方から何十人も出てきて捕まったんですね。それまではベ平連をやり始めて、さまざまなことに取り組んで、ある種の高揚感もあったと思います。そこに本当に冷や水を浴びせかけられ

た。ものすごく落ち込んだんですね。

そんなときにハンパクという話が出てきた。文化人も含めていろんな人たちのところに出かけて、東京に行ったり、あちこちに動いて、呼びかけて、やっとハンパクを実現できた。万博のように何か立派なパビリオンをつくったわけじゃないけれども、いろんな人が集まってきた。毎日毎日、新しい発見と出会いがあつてね。そういう意味での高揚感が面白かった。

### ハンパクの準備過程

大野：ハンパク協会の事務所にはどれぐらいの人が集まっていたんでしょうか。

植野：主要なメンバーでは10人か20人ぐらいはいたと思います。関西ベ平連で参加し始めた人たちが中心でしたね。10代から20代後半ぐらいまでの若い人たちが中心です。

大野：そうすると若い人たちによって企画が考えられていったイベントになりますね。

植野：そうですね。その日に梅田の地下街で初めて会ったばかりといった人も集まってくるんです。だから、そういう人たちに「会計をちょっとやっとな」とか、「デモのほうをおまえやってや」とか分担しながらやっていたんです。ある意味では素人集団で、すべて試行錯誤ですよ。そういうメンバーだからこそ、運動の本質みたいなものがそこにはあつて。つまり、企画や行動をするたびに、何か違うものを生み出すことができるというようなね。何かの規制があつて、これ以上は駄目だとかね、そういうことはなかったわけです。

大野：なるほど。ハンパクのプログラムについてはどのように決めていかれたんでしょうか。

植野：事務局がすべてを決めたというわけでもなくて、あっちこっちからこんなことをやりたい、あんなことをやりたい、と声がかかる。やりたいというよりも、こんなことするから場所を取つてくれ、というようなことです。別にこっちが何か枠をつくったという記憶はあまりないし、あつという間になんかいろんなことが出てきたなというような感じでしたね。

大野：それは手紙で来るわけですか。

植野：ほとんど手紙です。あとは直接事務所へ来られたり。

南大阪ベ平連や北摂ベ平連は小学校や中学校の同級生が核になっているんです。だから地域的にもまとまりがいいんですね。ハンパク協会と関西ベ平連はそういうものではなく、どこからでも人を受け入れるから、本当に事務所に毎日知らん人が来るんですよ。どこから来たんですかと聞くと、鳥取とか、岡山とか、大阪以外のところからけっこう集まってきた、「何かすることないか？」と言われ、それやったら「これやってみ」という感じで振り当てていく。明日来れる言うてたのに、やっぱり来られへんとか、もうそんなまちまちですし、みんな若い人だからええかげんと言えええかげん。だから、事務所に来て、「ニュース担当する人が今日は来てへんな。しゃあないから誰かやって」って、そんな毎日でした。

いろんな議論をやっていく中で、ハンパクにも万博の太陽の塔みたいなものをつくろうという話がちょっと出たことがありました。建築や設計なんかをやっていた人がいて、自分が素案をつくると言つて、つくってくれた。段ボールを素材にして四角く積み上げていくようなものでした。私は正直、どう見ても格好よくないし、発想としても面白みがないように思ったんです。結局、ほかの人からも積極的に推す意見がなくて、やめようとなった。太陽の塔より小さくてもいいから、格好いいと思えるものだったらシンボルになるけれど、そうでないのなら、そんなものをつくる必要はないなと。タワーのようなものにこだわるのはやめようと議論しました。あれはやめて正解やったな。

番匠：ハンパク協会の出していた『ハンパクニュース』にもタワーの図が掲載されていましたね。

植野：載せた記憶があります。

大野：『ハンパクニュース』の編集作業には1号から関わっておられたのでしょうか。

植野：中心的にやっていたと思います。新聞部の経験がありましたから。ガリ版だったわけですが、ガリ切りは山本さんが圧倒的にうまくて、学びました。

彼は学生時代からずっとやっておられて、いわゆるガリ版の孔版文字、もう本当にきれいなんですよ。四角い中にきれいに字を入れていくんですね。私はまだましなほうでしたけども、下手くそな人は絶対に中に埋まらず、はみ出てしまう。そういう人は山本さんによく怒られてましたね。

『関西ベ平連ニュース』もガリ版でしたが、その後、活版に変わりました。大阪の社会党のあったPLP会館に大阪軍縮協の和田長久さんがおられて、その設備を借りていわゆる版をつくって印刷をやっていました。『ハンパクニュース』もそこでつくらせてもらってたんちゃうかな。

みなさんの山本さんと木村さんへのインタビュー記録に、ハンパクのロゴをM君がつくったんじゃないかとありました。彼に聞いたんですけど、「いや、記憶ない」とのことでした。でも彼はとてもデザインがうまくて、当時の横断幕やゼッケン、プラカードなど、当時としてはきれいなデザインをつくってたんですよ。

大野：ハンパクをつくりたいと集まってきた人は、何を問題と考え、ハンパクでは何ができると思って集まってきたんでしょう。

植野：もともとはやっぱりベ平連ですから、ベトナム反戦運動というところが一番大きな根っこになっていた。「万博に反対」という気持ちでハンパク事務局へやってきたという人を、私は実はあまり知らないんですね。ただ、ベ平連の活動よりもハンパクのほうがちょっと広い。例えば芸術ですよ。演劇をやっていた人、映画をやっていた人たちですね。すると、今までベ平連に来なかったけれども、ハンパクを機会に参加して、そのままベ平連の運動にも取り組み続けるという人もいます。ハンパクがベ平連運動の幅を広げたという面も多少あったと思います。

#### 自分が呼びたい人をハンパクへ呼ぶ

大野：植野さんがハンパクでやりたかったことは何だったんでしょうか。

植野：一番したかったのは演劇で、先ほど触れた自由劇場をハンパクに持ってきたいと思ったんです。

ハンパクの前に「プレハンパク」というイベントを3回ぐらいやりました。第1回目が高石友也さんとかを呼んでフォークをやった。2回目に、私が一番呼びたかった自由劇場の佐藤信さん<sup>14)</sup>や針生一郎さんらに来ていただいて、芸術論をやりました。そして、3番目はもうちょっと理屈っぽく、大江健三郎さんなどが来られたのかな。私は針生一郎さんや佐藤信さんの出番をつくりたかった。

この企画の段階で佐藤さんに会うために、六本木の自由劇場へ行って話をさせてもらいました。佐藤さんはハンパクについて非常に共感を持ってくれて、「家まで来い」ということで家へ行かせてもらった。何度かご自宅で食事させてもらいましたね。それで私たちとしてはハンパク会場の大阪城公園で黒テントをできないかと模索したんですが、時期的に難しいということで実現できませんでした。それが一番心残りでした。

大野：自分が呼びたい人をハンパクへ呼ぶという感じだったわけですね。

植野：そういうことですね。

植野：林光さん<sup>15)</sup>も呼んでいなかったかな。林光さんの家にも行ったのですが、自由劇場の音楽は林光さんのものが多いんですよ。

番匠：林さん、当時はやっぱり自由劇場の音楽と、あと映画での音楽も担当されていますよね。新藤兼人の映画であたり。

植野：そうですね。私は映画のほうはあまり関わってなくて。もう一人、鳥取から来てたUというのがいて、彼が映画が好きだった。ハンパクではどこまでやってたんかな。

番匠：奈良の交流の家というハンセン病の宿泊施設があるのですが、そこに所蔵されている資料を調査したところ、ハンパクの経理関連の資料がありました。きっとハンパク協会に出入りしていた方が交流の家に関わっていたのだと思うのですが、経緯はよくわかりませんでした。資料を確認すると、プレハンパクの会計で赤字7万円などとあり、しかし、3回目のプレハンパクではけっこうお金が入ってきた、ということのようでした。

植野：プレハンパクではそれなりにまとまったお金

が集まりましたね。各地の労働組合からもまとまった額のカンパがありました。プレハンパクの中でもフォークのイベントはすごい人でした。当日、私は事務所にいたんですけど、会場の中央公会堂から電話がかかってきて、「入り口にたくさん人が集まっている。場合によったら早く会場を開けることを許可するから、とにかく現場に来てくれ」と言われました。会場に行ったら、あそこは入り口へ階段で上がっていくのですが、そこがすでに人でいっぱい、その前の公園にも人があふれていた。それで、とにかく早く会場を開けようということになりました。有名なタレントのコンサートぐらいの勢いで人が集まっていて、とてもびっくりしました。来場者は1,000人は超えていたでしょうね。

番匠：チケットの売上げがかなり多かった。

植野：そうですね。多かった。

番匠：ハンパクでの大きな支出としてはテント代でしょうか。

植野：テント代と会場費でしょうね。大阪城公園の会場費がいくらだったのか、思い出せないけれども、それなりの金額がかかっています。大阪市に支払ったわけですが、たぶん、大阪市の労働組合からの支援があって、実際に払ったのはたしか規定額の半額なんです。組合がうまく交渉してくれて、半分だけ借りるというような話にしてくれたはずなんです。組合がそういう大人の知恵を出してくれて、大阪市の中にもそのように対応してくれる人がいた。

とにかくハンパク協会という名前はあるけれど、組織だった組織というのでもなくて。

大野：意思決定の会議があるわけではないのですか。

植野：一応は会議を持って、やることとやらないことを決めたり、分担を決めたりとかしていました。会議メンバーもほぼ固定していたものの、出席資格があるわけでもないの、さっきたまたま事務所へ訪ねてきた人が一番大きな顔をして参加するということもあるわけです。あまり形式ばってないというか。

大野：そのようなハンパク協会での会議のやり方は、関西ベ平連の会議でも同じだったんでしょうか。

植野：そうです、一緒ですね。だから、別に誰かが議長というわけでもないんです。最初の頃は山本さんや木村さんが出てこられてたけど、あの人たちがだんだん少し疎遠になっていくと、私が議長ではないけれど、さあやろうかみたいな感じで。今度の10・21はどうしようか、プラカードを誰が担当するかとか、決めていく。勉強会をやるときは、誰かが提案したら、その人がチューターみたいなことをやる。ときに山本さんあたりからけちょんけちょんに言われることもあったり。

大野：そういったかたちで、山本さんのような少し上の世代との年齢差や経験の差は運動の場面では出るんじゃないですか？

植野：でも、年配の人のほうがベ平連の経験が長いわけでもないんです。若い人のほうが、ベ平連での経験が長いこともある。だから、去年の10・21はこんなやっとなというくらいで、大きな経験の差があるというほどではなかったと思います。

### ひょっとしたらユートピアのような反戦デモ

大野：運動の経験年数が長い人が、ベ平連やハンパクの主導権を握ってしまうような雰囲気はなかったのでしょうか。

植野：例えば、我々はデモといっても「普通のデモ」しか知らないのですが、すこし年上の、山本さんの立命館大学在学中からの仲間の立川さんという人がおられて、彼から「おまえら、ジグザグのやり方も分らんのか、こうやんねんぞ」と言われたことはありました。彼から私たちは運動の方法論みたいなことを教えてもらったということはありません。

でも、その一方で、例えば私たちが横断幕をちょっとでもきれいにしようとする、山本さんや木村さんから「へえ、そんなことを考えんのか」という反応もありました。山本さんからすれば、我々のやることはちょっと異質に感じておられたみたいです。米軍のエンタープライズが佐世保へ来たときに、デモ隊の前に白い幽霊の格好をした3人ほどが飛び出して捕まったということがあったんです。その翌日か翌々日に、「あれ、おまえやろう」と言われて、「違う違う、大阪にいましたよ」とい

う話をしたんです。つまり、山本さんたちからしたら、自分たちの時代にはなかったことを我々はやっている。でも、「そういうことはやめとけ」と言われたことはない。心齋橋とかでゼッケンをつけて歩いたんですけど、デモをするよりも歩道を歩いて、隣の人にちょっとスローガンを言うてみたり、話してみたりということをしたんです。最近になって山本さんから「おまえら、ようあんなことやったな」と言われて。私にしてみたら、ああそうですか、みたいな感じです。誰かが考え、誰かがやり始め、面白いからやろうじゃないか、今度もっとちがうことをやろうよ、となくなっていった。だから、組織で決定するとか、誰かが主導権をとるというのではない運動のやり方でしたよね。

番匠：シュプレヒコールをあげるようなデモではなく、歩きながら隣の人と話す。

植野：「ささやきデモ」みたいなものですね。心齋橋筋の人混みを歩いているとき、隣の人にチラシを渡しながら「こんなことやってますねん」と、そんな感じですね。商店街のアーケードを歩きました。

私たちがデモをやると、歩道から入ってくる人がたくさんいました。飛び入りです。スタート地点で100人だったのが、終わったら200人、300人になっているということがざらにあった。その人たちから「今度事務所へ行っていいですか」と聞かれて、「ぜひ来てください」と言うと、すぐにその人が事務所にやって来て、「私、何やったらいいですか」と。新しい人に仕事を見つけて与える、やってもらう仕切りをすることが、私は得意やったんです。

大野：飛び入り参加者がデモ中に入ってくる、事務所に行きたいとそこで言われ、すぐにやって来るなんて、すごいですね。なぜそんなことが可能だったのか。

植野：私もそうだったんですけども、やっぱり世の中のことに對してある種の反発であったり、いろんな抵抗感を持っていた。何か行動に表さないといけない。小田さんの影響が強いと思うんですけども、彼は「言い出しっぺがやる」と言っておられましたね。何らかの形でどんなことでもいいから行動に出なさいよと。金がある人は金でいい、力がある人

は力でいい、時間がある人は時間でいいと。多くの人が小田実のファンだった。小田シンパ、小田教になってはいけないという考えもありましたけれど。あの運動の空気感は非常に過ごしやすかった。一方で、学生運動などはだんだん先鋭化していき、はたで見えても非常に息苦しかったですね。ベ平連では運動をやることに苦しいという感覚はなかった。学生時代の遊び場所とあまり変わらないというか、こう言ったら怒られるかもわかりませんが、カラオケやゲーセンに行くような気持ちで参加できる。それでも運動の中に自分の存在感を感じられるんですね。

大野：世の中への反発と抵抗感があり、それを何らかの行動にしなければと、当時の人が思った背景や理由については、どうお考えでしょうか。

植野：今も背景としてはそんなに変わらないはずなんです。きっとね。ガザがあり、ウクライナがあり。あの頃よりもひどいかも分からないですよ。ただ、あの頃のほうがもうちょっと世の中に余裕があったんでしょうか。梅田の地下街で活動していると、通行人のほとんどがサラリーマンです。その人たちがゼッケンを見て、反対意見も含めて私たちと話し合いに来るわけです。話しかけてくるというその反応は、今から考えたらむちゃくちゃ不思議かもしれませんね。今だったらたぶん避けられると思うんです。遠巻きに近寄るだけでもかなり勇気のある行為ですよ。あの頃も恐らく勇気はある程度必要やったと思うんですけども、なんかそんなにハードルが高くなかったような気がするんです。それは私だけなのか、みんなそうだったのか。デモへ歩道から入ってくる。それも赤ちゃんを抱いた人もいれば、OL風のハンドバッグを持ったまま来る人もいる。いろんな人が入ってきた。そして、気がついてみたら事務所でいろいろしゃべっている。特に関西ベ平連はそういうさまざまな人の受皿みたいところがあった。事務所をできるだけ都心へ、みんなが来やすいところにしようと考えていたようにも思います。

大野：人や社会に余裕があった？

植野：社会全般を見れば今のほうが怒らんといかんこといっぱいあるのですが。

大野：スマートフォンやインターネットでのコミュニケーションが主流となっているいまとは違って、当時は目の前の人と話すことが基本であり大切だったのかもしれない。路上がコミュニケーションの場所だったということでしょうか。

植野：デモするとき、目の前には歩道と車道がありますよね。だけど、当時は人がわりと気楽に歩道から車道へ入ってくる。まさに一線を乗り越えるわけです。だけど、ごく軽々といろんな人がやってきた。その背景には、デモする人たちが「普通の人」やったから、という気もします。堅苦しい顔をしているメンバーばかりでやっているわけじゃない。女性と話しながらという人もいる。いろんな服装の人がいる。そういうデモには入りやすかったのかもしれないね。

大野：覆面でヘルメットをかぶる一群ではなくて。  
植野：それは入れないですよ。扇町公園を出発して中野や難波の体育館などの解散地点まで来たら、まったく想像がつかないぐらいの人がずっと向こうまで続いていて、驚くということがたくさんありました。その人たちが本当に次の日に事務所へやって来て、その次の日から梅田の地下街でピラを配っている。あれはひょっとしたらユートピアみたいな。今考えたらね。

### ハンパクの開催時期の意味

番匠：関西ベ平連の定例デモのコースは？

植野：だいたい一緒です。扇町公園出発で中野解散。ただ御堂筋でできるようになったときは今の難波、昔の難波球場が解散地点で、本町4丁目を曲がる形やったかな。鞆公園集合というコースもありました。

番匠：コース選びはデモの大きさや人数によって変えていたということですか。

植野：そうですね。10・21は総評が主催だったりして大きくなる。総評か大阪軍縮協があつて、我々はそこへ参加する形です。労働組合の旗がいっぱい並んでいると、一般の人は参加しにくいので、我々ベ平連がデモの一番後ろのほうにいて、ほかの参加者や飛びこみ参加者をかき集めていくみたいになっ

た。あるいは、党派が中心のデモになっていたら、関西ベ平連主催という形をとることで、参加しやすいデモにしたり。

こうしたデモの会議には党派も参加するのですが、中核と革マルが居合わせると話にならないんですね。だから、ベ平連が司会と進行をやって、両者のあいだに入る。関西ベ平連が主催をやってくると、みんなが集まりやすいと言われて、よくやったんですよ。それでも中核と革マルがにらみ合うみたいな形がよくあった。どこかの会議室へ行ったら、各グループ・セクトから参加者は一人といわれていても、会議中にだんだん中核と革マルが増えてくるんですよ。フロントからも最初1人参加していたはずなんです。すっといつの間にかいなくなるんです。私たちにしたら、フロントの人間だったら何人か知りあいもいたから、ちょっと心強いなと思っていたんですが、いつの間にかいなくなってしまう。そうして会議に残されてしまうと、中核と革マルの間にベ平連が挟まれるかたちになる。中核と革マルそれぞれが20人ずつぐらいになってしまっていて、これはやばいと思って、あとはもう知らんと逃げたことも何回かありました。

番匠：党派のあいだに入るという経験はハンパクよりも後でしょうか。

植野：69年、70年に向けてですね。梅田の事務所は中核派の事務所に近かったんですよ。梅田の地下街で、中核派に個人名まで挙げられて「殲滅せよ」みたいに批判されたこともありました。でも身に危険を感じたことはなかったし、言うだけやなというぐらいに思っていました。ハンパクの頃はその関係が緩やかだったのかもしれない。70年くらいから、運動全体がちょっとすさんでくる。だから、ハンパクは本当にいいタイミングでできたのかもしれないね。

番匠：開催時期を万博の前の年に決めたのはどういった経緯があったんでしょうか。

植野：いろんな議論の中で、「反戦のための万国博」の「反戦のための」というのがだんだん取れていきました。カタカナのハンパクになっていったんですよ。万博を批判するというより、我々はハンパクと

いう別のもの、独自の集まりをつくろうという感じになってきた。だから、万博に時期をぶつける必要がなくなっていったんですね。むしろ1年前に先取りしてやっつけてしまおうみたいな。

翌年に万博が始まったとき、大阪で万博反対運動に積極的に取り組んでいたのが毛沢東派でした。関学は毛沢東派がけっこう多かったんです。すると、彼らに「ハンパクをやったのにもかかわらず、なぜ万博粉碎デモをやらないんだ」と何回もつるし上げられました。「いや、僕らはハンパクであって、万博は関係ないねん」みたいな言い方をしたら、余計に怒られました。「思想が軟弱や」と言われましたね。

そのあたりの議論は自分でもきっちり整理できてるわけじゃないんですけど、やっぱり「反戦のための万国博」から「ハンパク」という片仮名の名称が徐々に定着し、広がっていったんですね。何となくこっちがじっくりくるようになっていった。

#### ハンパクの開催中の慌ただしい日々

大野：ハンパクの開催期間中のご経験についても伺いたいです。

植野：毎日目まぐるしくいろんなことがあったという気がするんですね。一応入り口らしきところに机を置いて事務局みたいな形にしていたんです。カンパの受付なんかもそこでやっていた。今日一日のスケジュールの管理や、今日来られて何かをやるという人たちへの対応みたいなことまで、まさにてんやわんやという感じでした。

やっぱり印象的だったことの1つはホットドッグ事件<sup>16)</sup>がまず起こったことでした。これは正直なところ事務局的には知らんぷりしておこうと思いましたが。そんなんこっちが関わるんじゃないという気持ちでおったんですね。参加者から「ホットドッグ屋の思想信条がハンパクに共感してるはずはない。だから追い出せ」という意見があった。だけど、「思想信条で追い出すっておかしいでしょう」という意見もある。また、「彼らも労働者である。労働者を排除するのか」という意見もあった。それらの意見はまったく平行線であって、議論は終わら

ないんです。結局、ハンパクの会場内で参加者がおにぎりを売ったりしてるところもあるのだから、そっち側をあくまでも優先しようという程度の話になり、ある人がホットドッグ屋さんと話をつけて帰ってもらったみたいなんです。なるほど、こういうことをやるとこんな問題も起きるんだなと思って見ていました。

大野：まったく予想外の出来事？

植野：そうですね。

大野：ホットドッグ屋と話をつけたのは事務局の人なんですか。

植野：事務局じゃないんです。何ていうのか、ベ平連の運動にも、ハンパクにも、いろいろバックアップしてくれた方ですね。社会党の西風勲さんの秘書をされていた川島雄三さんです。川島さんは我々の運動に必ずしも全面的に賛成しているわけではない。組織の人ですから、意見が合わないことはよくありました。けれど、市民運動も熱心にご協力の方でした。川島さんは私たちベ平連の運動について、何か口出しするような方ではなくて、でも、いろいろとお金の支援などをしてくれました。私は大学を辞めて、ハンパクの後になりますが、彼の会社で半年ぐらいお世話になって働いていたこともありました。舎弟みたいなものですかね。

大野：ホットドッグ屋をめぐるのは、川島さんがみんなの意見をまとめたわけでもなく、割と勝手に、自分の判断で出ていってくれないかと対応された？

植野：そうですね。私はそれを見て、助かったと思いました。彼は親心的にね、私たちのやることがめちゃくちゃ心配でしゃあないんですよ。ハンパク会場まで見に来て、ホットドッグ屋が入っていると。会場内では参加者が物品販売をやっているし、ハンパク協会としての資金もちゃんとせんとあかんの、外からやってきた連中にそこをかすめ取られてどないすんねんというところだったのでしょ。こっちはホットドッグ屋がいてもよろしいやんと言うのに、彼は追い出したんです。しかも警察に電話をかけてね。

大野：川島さんが警察に電話をかけたのでしょうか。記録を読むと、警察を呼んだことによって「事務局

は権力を使って排除するのか」という批判がおり、事務局は突き上げられている。

植野：彼にとっては当然のことやと思ってるんでしょう。けれど、反日共系の三派全学連のグループは当然騒ぎ出して、「ハンパク協会の保守的体質」などと言って、ぼろかすに批判されました。川島さんが反発を受けながら、一人でそれに応戦しました。それが新聞にまで出るようなことになって。結局はまあ、川島さんには「ともかく今日からは会場に来てくれるな。我々で解決しますから、一切姿を見せんとしてくれ」と頼みました。彼はぶつぶつ言いながら帰りましたけれど。それで何とか収まったんです。私はその後も親しかった方なので、その後、「あのときごめんなさい」って伝えたんですが。

番匠：ホットドッグ屋はその後はどうなったんですか。もう来なくなった？

植野：もう来ない、怖がって。

ハンパク会場内での参加者による出店については、ハンパク協会としては基本的に来る者は拒まずという方針でした。一番規模の大きかったのは日中友好協会です。中国物産の販売をしていましたね。中国物産展の出店料というのは、それなりに大きかったように思いますね。

番匠：そうですか。ほかと違って？

植野：別に差別したわけじゃないけれど、彼らはそこで商売をやるわけですから。反戦のための中国物産展でもないようなので、もらうところからはもらったらええやないかと。あとはキューバ大使館も参加していました。大使が来てくれた。あれは、多分、小田さんが調整したんでしょうね。

番匠：ハンパクではさまざまな講演会も開催されていました。「反万博」ではなくて「反戦のための万国博」なんだという考えがあったとのことですが、講演会のプログラムを見てみると万博を意識しているなとも感じます。例えば、中岡哲郎さんが科学技術をどう考えるかというテーマで話されています。原発も含めて科学技術を推進していこうとする万博に対して、科学技術史から異議申し立てをするというような。こうした企画はどのようにつくられていたのでしょうか。

植野：そういう真面目な、真っ当なテーマでの万博批判、科学技術批判というのはね、山本さんのリーダーシップが大きかったですね。

番匠：少し話はかわりますが、開催期間中は昭和町のご自宅から通われていたのですか。

植野：家は昭和町でしたけど、開催期間中はほとんど、みんなと会場のその辺でごろ寝したりしてました。

番匠：ずっと泊まりながら。夜はどんな感じでしたか？

植野：いろいろみんなで話したり。夜遅くまでいろんなプログラムがあったので、その準備や片づけなども、みんなでわいわいがやがやしていました。森之宮か京橋あたりまで食事しに行ったり、飲みに行ったりしたこともあったかな。

大野：会場内で炊き出しするとかは？

植野：一応やってみましたね。ちょうど北海道から来た女の人が、大学生やったんかな、毎日ともかくおにぎりをぎょうさんつくってきてくれて、おいしかったなという記憶があります。どこかに泊まっていて、そこでご飯を炊いたと言っていました。かわい子だったというのは覚えてますけどね（笑）。名前も知らないです。それでハンパクが終わるとともに消えてしまったから、その後も何も知らない。

番匠：ハンパクとともに来て。

植野：ハンパクとともに消えました（笑）。

大野：現場で火を使っての煮炊きは？

植野：やってなかったと思うんですよね、基本的には。一応禁止されてたはずなんです。公園の規定でね。それをやってしまうと、警官が入る口実になりますから、そういった規則は遵守しよう。ごみはちゃんと片づけるとか、ちゃんとやりましたね。

大野：そういったルールはチラシなどで告知されたんですか。それとも声がけをしてみた？

植野：声がけをしたし、何かそういうものを配ったかもわかりません。

番匠：会期中、植野さんの動きとしては、ずっと事務局のブースに座っておられたんですか。

植野：というわけでもないです。会場を見に行ったり、プログラムに参加したり。講演会は二、三行き

ました。中核派の北小路敏さんの話を聞いたような気がします。

番匠：他に見たもので印象に残っているものはありますか。

植野：蒸気機関車を持ち込んで走っていた人がいましたよね。「反戦と関係ないやないか」って言う人もおったんですよ。けれども、ハンパクやからええやんみたいなね。人気があって、むちゃくちゃみんな喜んだんです。何かハンパクらしいかなと思いました。

番匠：初日に登場したゼロモギラですね。あの方は会期中ずっといたんですか。

植野：初日だけじゃないですかね。私はとにかく目まぐるしく何かしてたけれど、何かこれをしたという、はっきりした記憶がありません。正直言って。

大野：忙し過ぎたということですか。

植野：いろいろあちこちから声かけられたし、例の米軍ファントムの残骸<sup>17)</sup>についての対応もあったし。ファントムについては、法的な観点からすると、おそらく「遺失物」を勝手に動かしたということになるんでしょうね。だから、会場で警察による強制捜査が行われるという話があったんです。ハンパクは8月11日が最終日、この日は10万人デモを呼びかけていました。参加者は御堂筋へデモに行ったんですね。事務局からは会場に10人くらい残ってたんですよ。それは警官の動きを警戒してのことです。警官が来るときにはむしろ人数が少ないほうがよい、いろんなセクトが残っていたらかえって問題になると考えました。私は「デモの方が大事だ、この責任は持つから」みたいないい格好をしましたが、警官は結局来なかったので助かりました。ただ、最終日のデモのときには既にファントムは会場から撤去されていたと思います。だから、警察が来ても何もなかったはず。

それ以外にも、例えば、大阪城公園から京橋へ出るあたりで警察が検問をし、職質みたいなことをやっていて、弁護士が警官を告訴するみたいな話もちあがりました。弁護士からは「事務局は現場に立会え」と言われて行ったり。私にとってはどうで

もいいというか、告訴したければしはったらええやないかという感じでした。ともかくよろず相談みたいなことで振り回されてた感じがあります。一方で、自分でもいろいろ見て回りたいという気持ちもありました。だから、5日間、ほんとに何やってたかなと、うまく思い出せない感じです。

大野：すこし細かいことなんですけど、ハンパクの会期中に毎日刊行されていた『日刊ハンパク』には関わっていらっしやったのでしょうか。向井孝さんがこれを発行していたとも言われていて、『日刊ハンパク』はほとんど無記名なのですが、最終号には「孝」と署名がありました。

植野：私はやっていないです。この字は何となく向井さんっぽいですね。我々も日刊のチラシのようなものをつくったような気がするのですが……。それぞれ勝手にいろいろやってたから……。

大野：ハンパク事務局として出していたものがあった？

植野：と思うんですけどね。

大野：会期中ですか。

植野：はい。だけど、この『日刊ハンパク』は明らかに向井さんっぽいですね。

大野：内容もアナキズム的で、「自由連合」といった言葉も使われています。

植野：向井さんがたぶん勝手にやってはったんでしょうね。主催者や参加者の刊行物ではないんですが、朝日新聞か毎日新聞か、どちらか忘れちゃったけれども、全国紙の大阪版でその日のハンパクのスケジュールを書いて、広告してくれてましたね。

番匠：どなたかがマスコミ対応をされていたんですか。

植野：私がよくマスコミには働きかけてましたね。新聞社はよく回ったんです。今度こんなことをやるから記事にしてくれとね。

### ハンパクをふりかえって

大野：ハンパクが終わった後に振り返りや総括の会議はあったのでしょうか。事務所の整理やお金の精算作業がどのように行われたのかも気になります。

植野：お金についてはきっちり精算をやったと思い

ます。事務局の会議はあったけれど、ハンパクを総括するような会議だったのかな……。総括文書を出したという記憶はまったくないですね。地方からも事務局に来られていましたし、ハンパクが終わるとお盆、そして夏休みということもあったと思うんですが、みんな散り散りばらばらに帰ってしまった。ハンパクの後、しばらくはちょっと空気が抜けたような感じでした。事務所はそのままありましたし、関西ベ平連の運動もある。8月が終われば10・21などが控えていた時期でもあって、ベ平連の日常の活動に戻っていったという感じだったんでしょうね。

大野：植野さんにとっては、5日間を終えたときの気持ちは？

植野：ああやっと終わったなぐらいの感じです。

先ほど話したように、最終日に10万人デモをやることになっていました。10万人はいなかったと思うけれど、1万の単位はあったと思います。私はそれに行っていないんです。先ほど話したように、ファントムめがけて警察が来るかもしれないという話があって、会場に誰か残らないといけなかった。私は警察への対応を含めて残らざるを得なくて、楽しみにしていた最終フィナーレに参加できなかった。だから、私にとってはハンパクの終わりの部分はすこし中途半端なもので、ああ終わったなというような感じ以上でも以下でもないぐらいでした。打ち上げで飲みに行った記憶もないですね。かなり疲れ切ってたというのもあったと思いますけど。

大野：ハンパクの事務局としてやりたいと思っていたことはできた、という感じはあったんでしょうか。

植野：できたことの1つは、ベ平連らしいことですが、党派を超えて、いろんな考え方もつ人が「ベトナム反戦」という一点で集まる場をつくることができたこと。中核派も来た、革マル派も来た、でも、ハンパクの中では内ゲバはなかった。それはよかったなと。

ただ、1つ1つのことをもっと詰めたかったという思いは、ものすごくありました。先ほど話した演劇のこともそうです。企画を詰めるためにはあまりにも準備期間と我々の力量に無理があったんだろうと思います。けれども、とりあえずは我々の力の範

囲ではできたんだろうと思います。

番匠：植野さんご自身は演劇と映画にご関心があったわけですが、演劇関連のプログラムではやりたかったことは実現できたんでしょうか。

植野：結果的にはほとんど何もできなかったですね。演劇集団はいくつかは来ていましたが、そんなにいろいろなことはやってない。テントを使ったものもなかったです。

大野：プログラムには人形劇がありましたか。

植野：そういう形であったかも分からないですね。あとは16ミリを持ってきて映画を上映したのかな。

大野：小川プロの作品が上映されたと聞いてはいるんですけど。

番匠：スクリーン5つを使って野外上映を同時にやったようです。『網走番外地』などの作品も上映されたと思います。商業フィルムについてはお金を払って持ってきたんでしょうか。

植野：その頃は商業映画を貸し出す会社があったんですね。そこには協力してもらいましたね。

当時、高倉健さん派と、『男はつらいよ』の寅さん派があった。これはハンパク後のことですが、健さんと寅さんを同時上映したらええやないかと思って。中之島の中央公会堂だったと思うんですが会場を借りて、16ミリフィルムを貸し出してくれる会社に頼んで、同時上映をやろうとしたんですよ。でも、まだ五社協定がある時代で、貸し出す会社に圧力がかかって中止するということがありました。大阪の東映本社が梅田にあったんですが、その前でビラをまいて、東映の言っていることは高倉健の映画の思想に反するやないかと抗議したんです。まあ、ええかげんなことですが。でも、朝日新聞が取り上げてちょっとことが大きくなってしまって、結果的にはどこか小さい会場でやることはできたんです。五社協定側が折れたというか。中央公会堂が大阪東映会館から何キロ以内にあると、だから駄目だというような理屈だったので、それじゃ、その範囲から外れたらいいんですねと反論して。ハンパクの前から既に映画会社や配給会社とのやりとりはありましたが、ベ平連での活動の1つとしても映画上映会を開催していました。

## 関西ベ平連の自然消滅とその後

福井：70年安保に向かってだんだん運動は変わっていくと思うのですが、関西ベ平連ではどのような取り組みをされたのかをお聞きしたいです。

植野：ハンパクが終わった後に事務所は中崎町の芝山ビルというところに移り<sup>18)</sup>、さらに天満のほうの南森町へ移っていきました。公害問題や薬害問題についての運動をやっていた人たちと共同で事務所を借りることになったんです。ハンパクが終わって70年になった頃から、いわゆる反公害闘争がとても盛り上がり、いろんな運動体がありました。

ハンパクの頃からでしょうか、ベ平連の発行物の発行部数が飛躍的に増えていったんです。とてもガリ版では無理となって。南森町の事務所のわりと近くに社会党の大阪本部と大阪軍縮協の事務所がありました。そこの和田長久さんにさまざまな協力してもらっていたんですが、事務所の輪転機も使わせてもらってたんです。それで印刷はむちゃくちゃ楽になった。月刊だったと思いますが『関西ベ平連通信』については、タブロイド判の活版印刷に変えることもできました。毎日発行して梅田で配る『夕刊関ベ通信』は相変わらずガリ版でしたから、自分たちの事務所でやっていたけれどもね。

その後、関西ベ平連は解散したわけではなくて、自然消滅していきました。あれは何年かな、ロッキードの頃で、東京で小田さんたちは「世直し」というようなことを言い始め<sup>19)</sup>、大阪では「いまこそ世直しを！市民連合」という市民運動がつくられた。先ほど話した南森町の、天満の事務所は関西ベ平連のものではなく、「いまこそ世直しを！市民連合」の事務所でした。

番匠：ロッキード事件は1976年ですね。

植野：じゃ、もうだいふ後になるんですね。その頃も梅田の地下街で同じようなことをやっていた。70年と同じような盛り上がりがあって、御堂筋デモもできたし、御堂筋すべてをフランスデモで埋め尽くすぐらいの人が集まっていた。「いまこそ世直しを！市民連合」は各地にできるわけですが、大阪ではそのメンバーと元関西ベ平連の人たちとは重なってたんです。もちろんベ平連を知らないとい

う新しい人たちも来ていました。

福井：関西ベ平連は明確に解散したのではなく、自然消滅という感じなんですか。

植野：そうですね。徐々にだんだん。山本さんは労働組合運動に入っていき、ベ平連はほぼ休眠状態になってしまったと思います。私が今の会社に入ったのは72年12月でした。73年から74年頃は仕事をしていた、関西ベ平連が消滅する過程を正直なところあまりよく知らないんです。

番匠：ハンパクの後、関西ベ平連としては活動は続いていて、若い世代や新たな参加者が入ってくる流れは続いていたのでしょうか。

植野：いや、それはやっぱり減りましたよね。

番匠：関西ベ平連の通信を読むと、71年頃には例えば入管闘争や能勢（大阪府）のナイキ基地<sup>20)</sup>の話などが載っています。関西ベ平連は、能勢の問題を含めて、関西の軍事基地問題を取り上げているのですが、それはどういう経緯だったのでしょうか。

植野：やっぱり饗庭野（滋賀県）、それから能勢、さらには伊丹空港の基地問題があったわけです。関西ベ平連では、ベトナム戦争において日本全体がある意味で基地となっていたことを問題化していました。戦争と私たちをつなぐ身近な存在は基地だったわけですね。基地問題はミサイル配備の問題であり、饗庭野での基地建設の問題であったり、さまざまなかたちで身近な地域に生じていました。自衛隊の信太山駐屯地へのデモもよくやっていました。だから、ベトナム戦争という広い問題からもうちょっと自分のより身近なところの問題へと目を向け、考えていったときに、足元の基地問題というテーマへ広がっていったということです。

番匠：植野さんにとって、ハンパクの後、充実していたなと思う取り組みは何かありますか。

植野：先ほど話したように、ハンパクが終わって、関西ベ平連もだんだんなくなっていった、私自身が運動と関わらなかった時期があったんですね。その後、「いまこそ世直しを！市民連合」に参加して、そこで久しぶりにいろんな人と会い、活動を再開するのですが、ベ平連のときの運動の高揚感ではなく、すこしレベルが違ったなとは感じました。

番匠：高槻市議選での山本健治さんを支援する選挙運動と「いまこそ世直しを！市民連合」の運動とは1つの動きなのですか。

植野：メンバーは重なってますけど、直接的な関係があったわけではないです。山本さんが選挙に出た頃というのは、各地で市民派の候補者が選挙に出るようになった時期でした。ベ平連も含めて運動においては、選挙ってやっぱり縁遠い存在やったんですよ。それがちょっとずつ変わってきて、大阪で山本さん、京都では鈴木正穂さんが出て、ちょっとずつ関心が集まるようになった。山本さんは75年に当選しますが、2期目の選挙（1979年）ではトップ当選だった。それで、いよいよ次は府会議員ということで、府会議員も1期目（1983年）は当選しましたが、2期目は残念ながら落選したんですね。私は府会議員選の2回目も3回目も、多少は応援に行っていました。

応援していたメンバーは明らかに高齢化していました。府会議員の2期目の選挙で負けたときはちょっとしんどいなという感じがありました。市会議員の選挙でトップをとったからといっても、府会議員選挙では組織票、政党票が圧倒的に強いのだなと。だから、府会議員の1期目は最下位当選だったと思うんですけど、よう通ったなと思いました。選挙中、市内を回っていると、ベ平連の頃のようにまったく見ず知らずの人が声をかけてくれるということがあったんです。市民運動的な熱を選挙の中でも感じることができました。

さきほど話した天満の事務所は「いまこそ世直しを！市民連合」と薬害に関する運動体、そして私の仕事の個人事務所との共同のもので、私個人も賃貸料を払っていました。私の仕事は開店休業のような状態でしたから、事務所で仕事をしているほどのものではなかったのですが。

番匠：天満の事務所はいつまで続いたんですか。

植野：80年頃かな。その後、私はあまり関わっていませんが、南森町に事務所を移した。それは「いまこそ世直しを！市民連合」の運動の続きです。梅田の地下街でピラまく活動がずっと続いてました。それも83年、84年ぐらいまでだったと思います。

## いま、戦争の時代に向き合う

番匠：ここまで生い立ちから関西ベ平連が終わる頃まで、長時間にわたってお話を伺っているのですが、これまでの運動を通じて植野さんが得られたもの、大切なもの、核となるようなものとは何でしょうか。

植野：とても当たり前のことなのですが、人として、人間として、小田さんが実に素朴に「殺すな」と言われたことを大事にしたいなと思っています。ガザやウクライナの問題を見てもそう思います。また、共通する一致点があれば、幅広い層が参加できるような運動のつくりかたが大切です。2015年の安保法制反対運動でのSEALDsのとりくみにはとても刺激を受けたんですね。だけど、時代的にはそうやってゆるやかにまとまるよりも、分断化というか、セクショナリズムというか、社会や人びとが分断していくほうへ向かっているのが嫌だな、辛いなという感じがしています。

やっぱりベ平連というのは大きな受皿になれたんですね。学生運動においては、党派性が問題としてどんどん出てくるわけですよ。ベ平連的な運動が党派の人たちの運動に影響を与えたというよりも、むしろその逆のほうが多かったのかなと思います。運動が浅間山荘事件のようなものになっていく過程があったわけで、それはとても残念というか、力が及ばなかったと感じざるを得ません。セクトの人間、内ゲバに走った人間からすれば、ベ平連運動はのどかな平和主義の運動ということになるんでしょう。でも、ベ平連一人一人の思いは決してそんなものではなくて、それぞれ自分の置かれた環境の中で精いっぱいのことをやっていたわけですね。そういう志みたいなものは、小田実さんや鶴見俊輔さんなどから学んだだけでなく、山本さんや木村さん、北摂ベ平連の坂本、あるいは歴史に名前を残さないような人たち、無名の人たち、言い換えれば隣近所にいる人たち、そういう人たちから教えてもらったし、互いに共感し合えた。そういう体験を持てた。これは何物にも代え難いものです。だから、お互い七十いくつになっても、話し始めると18歳か19歳になつてくるような感覚が持てるんだろうなと思いますね。

この間の豊中にあるロシア総領事館前でのウクライナ侵攻への抗議行動でも、平均年齢は70歳ぐらいです。若い人がなかなかいない。でも、今の若い人たち、皆さん方よりもっと若い20代、30代、あるいは10代の人たちが関心をもっていないわけではないんですね。とりわけイスラエルとパレスチナの問題に関心を持っている人は少なからずいる。実際に行動している人もいると思うんです。なぜそれがもうちょっと大きなうねりにならないのか。我々の世代のやり残してしまっていることがいっぱいあるなという気はずっとするんですね。いま、私たちに何かできないかなと。

考えてみたら、我々がベ平連の運動をやっていた頃は、自分事として考える、そして自分自身が行動しないことには始まらないという空気や意識が広くあったと思います。フォークソングをやっている人たちは、何か特別に歌に政治を持ち込んでいるつもりは一切なかった。歌が自分のメッセージや生き方であって、ベトナム戦争についても歌を通じて自分の主張をする。ベ平連にはそんな構えたものではない感じがあったのだと思います。

#### 【注】

- 1) 宇部興産は1942年に沖ノ山炭鉱、宇部新川鉄工所、宇部セメント製造、宇部窒素工業の4社を合併し設立された。山口県宇部市の炭鉱には強制連行された多くの朝鮮人がいた。
- 2) 高橋和巳 [1931-1971] 大阪府大阪市生まれ。小説家、中国文学者。大阪市立恵美第三尋常高等小学校、大阪府立今宮中学校などを経て、1949年に京都大学文学部に入学。1967年より京都大学文学部助教授。小説『憂鬱なる党派』（河出書房新社、1965年）をはじめ、その諸作品は全共闘世代に支持され、熱心に読まれた。
- 3) 日本アート・シアター・ギルドは1961年に発足。フランスのヌーヴェルヴァーグやアメリカのニューシネマなどを背景とし、また、60年代の学生運動や反戦運動、カウンターカルチャーの盛り上がりのなかで、大島渚、吉田喜重、篠田正浩などが監督した既存の日本映画とは一線を画す前衛的で非商業主義的な作品を製作・配給した。
- 4) 釜ヶ崎では1960年代に断続的に暴動が起きていた。1961年8月1日の第1次暴動から始まり、1963年の5月と12月、1966年の3月、5月、6月、8月、そして1967年6月まで、8次にわたる暴動が続いた。その詳細は原口剛『叫びの都市——寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者』洛北出版、2016年を参照。
- 5) 林屋辰三郎 [1914-1998] 歴史学者。石川県金沢市生まれ。

立命館大学教授、京都大学教授などを歴任し、歴史研究、なかでも中世芸能史研究を牽引した。主な著作に『中世芸能史の研究』岩波書店、1960年、『町衆——京都における市民形成史』中央公論社、1964年などがある。

- 6) 木村満彦 [1942-2023] 中国大連生まれ。ハンパク協会の事務局長、ベトナム反戦大阪行動委員会の代表を務めた。詳しくは木村満彦・山本健治・大野光明・番匠健一『反戦の意識がある人間をケンカせんよう集める』——無報酬専従のハンパク事務局長の日々『立命館平和研究』別冊第2号、2024年を参照。
- 7) 「ベトナム反戦大阪行動委員会」（略称「大行動」）は1966年9月18日に大阪で発足したベトナム反戦のための市民運動。
- 8) ベ平連は1967年4月3日付のWashington Post紙に岡本太郎の書いた「殺すな」の文字を大きく使ったベトナム反戦の意見広告を掲載した。ベ平連は「殺すな」の文字をバッジやステッカーにも使用した。
- 9) 関西ベ平連は1968年2月7日に行動を開始し、同年3月9日に第1回の集会を持っている。山本健治によれば「その時点までは、ある意味で活動自体が小規模で、十分に活動ができなかったけれど、3・9集会には約三〇〇名の人が集って、いろいろベトナム戦争について考えあひ、具体的な行動をしていこうと確認し合」ったという。1968年4月には梅田地下街で9回もの対話集会を開催するなど、活動を活発化していった。「関西ベ平連 山本健治」ベトナムに平和を！関西市民連合編『ベ平連資料集 8・15 記念国際連帯大阪集会 11・7 再びベトナムを考える集会 その他』34ページ（発行年月日不明。1969年と思われる）、立教大学共生社会研究センター所蔵、吉川勇一氏旧蔵「ベ平連」関連資料、S01 2011「関西ベ平連」。
- 10) 心斎橋の事務所の住所は「大阪市南区横堀7の20 南商ビル2階23号 国際関係研究室気付」（ベトナムに平和を！関西市民連合編『ベ平連資料集 8・15 記念国際連帯大阪集会 11・7 再びベトナムを考える集会 その他』81ページ）。
- 11) 作家・小田実は1958年にフルブライト基金によりハーバード大学大学院に留学し、その帰路、アメリカ、ヨーロッパ、中近東、アジアの22ヵ国を貧乏旅行した。その旅行記である『何でも見てやろう』（河出書房新社、1961年）はベストセラーとなった。小田は1965年に発足したベ平連の代表を務めた。
- 12) 1968年10月9日、南大阪ベ平連と大阪府職員ベ平連は「反戦文化フェスティバル」を共催した。中川五郎が反戦フォークソングを歌い、片桐ユズルが詩の朗読をし、関西ベ平連の青空状況劇団「目玉座」が寸劇を、そして南大ベが『反戦』をテーマに、機動隊員やベトナム特需工場の工員や全共闘の学生に扮して大討論を展開した。ロールプレイを披露した。200～300人の入場者を期待していたが、「宣伝不足と雨がたたって観客は百人不足だった」という（吐山継彦、2010、『なんだいべ』始末記（6））団塊世代&ビートルズ世代のための楽しく学ぶ「ブログde自分史」講座（<http://blog-jibunshi.seesaa.net/article/143950843.html>、2024年12月10日閲覧）。南大阪ベ平連らはこのイベントを発展させるかたちでハンパクのアイディアを練り上げていった。
- 13) ベ平連は1967年に米軍の空母イントレピッド号から4人の

脱走兵を匿ったことを一つのきっかけとして、米軍を離れた兵士を匿い、スウェーデンとフランスへの国外脱出を支援した。その活動のための専門組織としてジャテック (JATEC: Japan Technical Committee for Assistance to U.S. Anti-War Deserters) も結成された。ジャテックについては関谷滋・坂元良江編『となりに脱走兵がいた時代——ジャテック、ある市民運動の記録』思想の科学社、1998年、高橋武智『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた……——ベ平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想』作品社、2007年などを参照。ただし、両書は本稿で触れられている大阪を含む各地の脱走兵援助の活動のすべてを網羅しているわけではない。

- 14) 佐藤信 [1943-] 東京都新宿区生まれ。演出家、劇作家。1960年代にアンダーグラウンドシアター自由劇場を創立し、アングラ演劇を牽引した。
- 15) 林光 [1931-2012] 東京府東京市生まれ。作曲家。新藤兼人監督の映画作品の音楽や劇団黒テントの劇音楽を担当した。
- 16) ハンパクの会場内へ出店した運動とは無関係のホットドッグ屋を認めるかどうか、その対応をめぐる参加者の間で激論が起り、新聞、雑誌、チラシなどで大きく報じられた。
- 17) 1968年6月2日、米軍機 RF-4C ファントム偵察機が九州大学箱崎キャンパス内に墜落した。墜落事故は九州大学内外の学生運動、平和運動に大きな影響を与えた。墜落機の残骸の一部は福岡ベ平連によって秘密裏にハンパク会場に運ばれ展示され注目を集めた。詳しくは江藤俊一・番匠健一・大野光明「ファントム墜落からハンパク（反戦のための万国博）へ——江藤俊一氏に聞く」『立命館平和研究』22号、2021年を参照。
- 18) 事務所の住所は「大阪市北区葉村町1 芝山ビル2F」とある（『関西ベ平連通信』第38号、復刊7号、1971年10月）。
- 19) 東京では1980年12月22日に小田実、色川大吉、吉川勇一（元ベ平連事務局長）らを中心に「日本はこれでいいのか市民連合」が結成された。小田実ほか『日本はこれでいいのか市民連合』講談社、1982年を参照。
- 20) 1970年、大阪府能勢町に航空自衛隊の地对空ミサイル・ナイキJの基地建設が計画された。町議会、府議会が反対を決議し、地域住民や労働組合、反戦運動グループも反対運動を展開した。1977年、防衛大臣は計画撤回を表明した。